の分析から学んで欲しい

いまさらだが、そもそ

があり、4年での卒業が

本には未だに定員の縛り

機能を担っていたと言え 略こそが、実質的にIR

なり、教員の活動を不必 学ランキングの台頭も重 やアメリカ高等教育制度 よるアメリカ高等教育史

営が必要な状況は生じて

ための学生募集や入試戦 のではなく、定員充足の Rをやってこなかった.

ることになった。世界大

報の収集と比較が行われ

かくなんでもデータを入

しになる。その結果とに 論が不在になったり後回 るべきデータの具体的議

う。要は、「IR」とい

諸改革)は、必要だろ

(も含め諸々の高等教育

の自らをできるだけ客観 的に内省しつつ、大学の

内外をしっかりと「わが

う言葉が一人歩きし、そ

学によっては、IRを強 うな状況とは裏腹に、大 見るようである。そのよ を始めとした旧日本軍を

要されるまでもなく、厳

に、大学別の研究業績情

アメリカと同様に大学経

はいる。しかしながら日

を表層的に導入する前 らまず、アメリカのIR

が疑われるのである。

れ、低すぎると経営状況

教育の文脈においては、

「IRが無かった」「I

を行う大学の選抜の際

て、当該事業による支援

らも舞台脇で登場を控え 暇がない。そしてこれか P、GP、QA 等枚挙 に こいる改革キーワードが 上、必要ではあるし、対 動しており、いずれの改 革もその中身は、理念 は、社会情勢の変動と連 こうした改革の要請

> 原理原則上は自主自立 も、アメリカの大学は、

(自律)、全般的に政府

も、アメリカのそれとは

って、在籍率も卒業率 うに信奉されている。よ 未だに「正しい」かのよ

うな文脈からすれば当然

かのような状況が作り出 ースの構築運用が不可避

> いまま忘れ去られる… 結局分析にたどり着かな して良いのか途方に暮れ 張したあげく、どう分析 造されデータベースが膨 れてしまえ!と指標が乱

> に受け止めることが不手 振りかざすこと、無批判 入品であるIRを乱暴に すること、海外からの輸 ないこうでもないと議論 の定義を巡ってああでも

であり、こうした実情を り返していることも事実

で半ば身体化する形で、

識やノウハウは、これま

大学に関わる様々な知

現場の教職員こそが持ち

の戦略と改革と分析を繰 経営を成り立たせるため しい環境の中で自律的な

るのではないか。

れこそがIRの端緒とな

すことが必要であり、こ ことのように」見つめ直

要が喧伝され、データベ 要なまでに可視化する必

日本に無いのは、このよ カと全く同じIR機能が るのではないか。アメリ

であり、「IRが無い」

された。

意味が異なるのだ。

やはり政府による政策牽

馬鹿げている。

むしろ日

システムの開発構築や導

デーRを内面化する

誇大タームに振り回されないために

また、日本の大学は、

やり玉に挙げること自体

の専門家や業者が、情報

返している)。つまり、

くとも3、4回ほど繰り

があるのだ。

スを某国立大学では少な (ちなみに、 このプロヤ

も受け止める側にも課題 なのである。発信する側

つけは無意味である。自 無視したIRの一律押し

助努力の名の下にIRを

からこそ、このドメイン 合わせているだろう。だ

「システム作りの目的

側は、政府主導のトッ

IRを受け止める大学

強要するならば、

I R を

れてきたおかげで、IR

を示すべきだろう。 成功に導いた確たる証拠 ないことよりも)大学を 導入したことが(そうし

そのような極論はさて

い。我々はここ数年そう

れぞれの立場からIRを

放談する場があっても良

の言に耳を傾けつつ、そ る契機として、IRer 知識をより良く花開かせ

万式に長らく飼い慣らさ

スウン型改革や護送船団

をそれぞれの大学の文脈

も頭脳も乏しい。 あわて

に応じて根付かせる体力

かためきながら一とりあ

報収集と分析、そしてフ

げるための各種内外の情 の大学を内省し発展に繋 おき、要はIRは、自ら

い。また、高等教育の表

で、立ち寄ってみてほし した場を提供してきたの そうすると、情報処理

不備だ」と杓子定規に

はこの3年間に矢継ぎ早 だとか!)。大学関係者 行列を成している(ELS 「だとかRIだとかRE に、政策の正当性を示す 財務省や他の省庁向け

運営を成り立たせてきた レビュー)により、大学 基づいた相互評価(ピア 僚性原理(同業他者)に の関与を極力排除し、同

革の雨に打ちひしがれて おり、疲弊しきっている にくり出されたこれら改 と言っても良い。

ための対処戦略としても

良かった古き良き大学時 不可避な感は否めない。 つまり、何もしなくても にない様相を呈している 代には後戻りはできそう 員、も存在しない。さら る。日本のような、定 レディテーションであ を制度化したものがアク という経緯がある。これ

改革ワードは、IR、で ある。これら一連の改革 そして最近のホットな ただそれでも、歴史や 業がハードであり、学生 に、アメリカの大学は授

るべきだ」と喧伝・鼓舞 やっていない。だからや ことやってる。日本では ることが多く、異口同音 「アメリカではこんな うとすることに、「ちょ り取って日本に輸入しよ く異なるアメリカの制度 っと待てよ」と疑問を持 を、一部だけ表層的に切 たないことに疑問を感じ

されることが多い。紹介

学では、常に経営と教育

文脈にあるアメリカの大 性が高い)。このような

ベルでのIR機能を充実 カのような個々の機関レ

が必ずと言って良いほど

ているIRについても、 ざるを得ない。今騒がれ

探索が必須となり、学生 学生数の、最適規模、の の質を両立するような、

理・入試戦略、そして学

のは、やはり入り口

低い。むしろ日本の大学 させる必然性が日本には

にとっていまだに重要な

る大学評価は、大学設置

基準の大綱化と抱き合わ

いて作られてはいるが、 報処理系の専門性に基づ 情報処理システムは、情

様々な「根拠情報」を求 せで導入された当時から

情報やデータを想定して 大学で集めるべき特有の

る。現在のIRの議論も

ず、のルーチン化であ 作って魂(データ)入れ

似たようなことの繰り返

しに見えてならない。

ただそれでも、IR

り返したインパール作戦

無視して無謀な突撃を繰 状況では、まるで兵站を 象さえ観察されるような 行うという奇妙な逆転現 見返りとして改革支援を

門家の警笛を契機とし だ。私たちは、IRの専 のが、 I R 必要論なの よ」と冷や水を浴びせた

ヴァ書房。

かる高等教育論』ミネル

編、2021、

橋本鉱市·阿曽沼明裕

て、改めて大学人として

今やルーチンと化してい

視感」も覚えてしまう。

難物なのである。これら

り着かず」という悪循環 てに)データ分析にたど

IRを根付かせるための のだから、当然なのだ。 の無い制度の中で育った 頭脳や体力を付ける必要 のではなく、そのような これはなにも大学が悪い 化されてもいるだろう。 えず従えば良い」と慣習

ような営為が形式的な慣

活動なのだ。ただ、その

でもあり、大学の根源的

々指摘されたPDCA論 要論が勃興したときに度 り、30年前の大学評価必 ィードバックなのであ

ただきたい。

参考:IRよろず相談

https://rihe.hi

研究知にも是非触れてい たえのある、高等教育の れないためにも、『歯べ 層的なタームに振り回さ

のである。言い換えれば を何度も繰り返してきた

が仏 (=データベース)

Rを整備した大学にその 支援を先送りにして、I

ろもある。そんなところ

national-center,

liaison-center/ roshima-u.ac.jp/

習と化してしまったとこ

に「昼寝はおしまいだ

しかしながら、これが

必要論には、一種の「既

また、 このたびの IR

その必然となる歴史的!

元になったアメリカには

する際に語尾に「では」

(3)

先例がないケースについ

固有の文脈がある。だか 能が必然とはなりにくい

となる。これら指標が高 すぎると教育の質が疑わ

ころが伝統的にも大き

EやGCOE、グローバ

ル30等の政策事業におい

してしまい、そこに入れ タベースの導入が目的化 多い。ともすると、デー いるわけではないことが

学固有の文脈では、CO めていた。さらに国立大

い。つまり、日本の高等

もこの部分に依拠すると

問題)であり、経営診断 生募集と定員管理(充足

Rate) が重要な指標

率 (Graduation tion Rate) や卒業 の在学率 (Reten

そして日本では同様の機

緯や環境・文脈がある。

ワードは海外の紹介であ

制度、文化が大き

とされるし、退学も普通

に生じる(入退学の流動

さい。だからこそアメリ

は情け容赦無く単位を落

く、アメリカに比して個 引に頼るところが大き

本の大学の固有の文脈の

化」→「入れるデータの 議論の不在」→「(転じ

中に埋め込まれていた機

能を、適切に再解釈する

と労力を引き換えに、晴 くる。結果として高い金 入の必要性を持ち込んで

れて情報システムは構築

タが膨張」→「データの

死蔵」→「(挙げ句の果

て)あれもこれもとデー

ことも重要ではないか。

々の機関の経営裁量が小